

中斎塾 北関東フォーラム 第2回講話

令和8年2月21日(土)

お早う御座居ます。コロナ渦ではコロナに罹りませんでしたが、今回は風邪をひいてしまいました。

前回の東京フォーラム閉会と同時に健康医療開発機構の清水先生から薬を戴き、服用しました。その日は体調も声の調子もかなり悪かったのですが、現在はだいぶ回復しております。

それでは、まず素読から始めましょう。いつも通りご一緒をお願い致します。

(全員で素読)

有難う御座居ます。吉川さんのお話で感じたのですが、今日いらしている方は70代が多いですね。塚越さんもお元気で、80代の方々も活発に活動されていますし、今後は90代の方も増えてくると思います。

四十、五十はまだ若い、と言われますが、皆さんのお話を伺うと本当にその通りだと感じます。上毛新聞の投稿欄では、塚越さんのお名前がいつも出ています。俳句の他、最近は川柳を楽しみにしております。ご覧になる機会がありましたら、注目してみてください。

レジュメを考える際、金谷先生の論語を見ながら、量が多すぎず少なすぎないよう、適度で関連性のある文字を探します。今回は「中」という文字が目にとまり、「中道」や「中庸」等に注目しました。さらに「中を大切にする」という趣旨の一節も印象に残り、そこに線を引いたところ、このような形でレジュメに反映されました。

最初に「中道」とありますが、この言葉だけであれば比較的説明しやすいものの、再求の箇所に出てくる「中道」は、一般的に私たちがイメージする意味とはやや異なる使われ方をしています。

その為、学者の先生方の解説も其々の考えに基づいており、「中道」「中庸」等は基本的に同じ趣旨と解釈される事が多いのですが、この再求の部分については少し違いが見られます。

本日はその点を簡単に説明致しますので、同じような話だなと感じながら

お聞きいただいても結構ですし、やはり微妙に違うなと思いながらお聞きいただいても構いません。

①冉求 曰く、子の道を説ばざるに非ず。力足らざればなりと。子曰く、
力足らざる者は、中道にして廃す。今女は画れりと。

(雍也第六・10)

冉求が「先生の教えは素晴らしいと思いますが、自分は力が足りず、理解しきれません」と述べました。冉求は弟子の中でも上位に位置する人物ですが、自らの力量不足を理由にしていました。このような考え方の人は世の中に結構います。

これに対して孔子は、「力が足りない者は途中でやめてしまうものだ。しかし今のお前は、自分で限界を決めてしまっている」と諭します。つまり、自分で出来ない決めてしまう事自体が問題だという意味です。

ここでいう「中道」とは途中でやめてしまう事を指します。本当に力が尽きたのではなく、まだ力を出し切る前に諦めてしまう状態です。例えば相撲の稽古でも、途中でもう無理だと土俵を降りてしまう人がいますが、限界まで力を出し切ることが大切です。孔子ならそこで、「自分で限界を決めて途中でやめてしまうのはよくない。最後まで力を尽くすべきだ」と言うだろうと思います。

私の体験ですと、合気道の練習が思い浮かびます。シムックスを立ち上げた当初、警備員には体を鍛える時間や、何かしらの護身術を学ぶ機会が必要だと考えました。

警備員には若い方だけでなく、ご高齢の方や女性もいらっしゃいます。そうした老若男女全ての人が無理なく取り組めるものは何かと考えた結果、合気道が最も適していると思いました。レスリングや柔道、空手なども考えましたが、誰にでも出来るという点では難しいと感じました。

当時の私は合気道の経験がなかったので、指導出来る方として思い浮かんだ人が、学生時代の同期である石崎さんです。高校時代から合気道に打ち込んでおり、かなりの実力がある人でしたが、学生時代はあまり交流がありませんでした。

石崎さんが卒業後に大学の職員をされていると聞き、大学を訪ねて合気道を教えてほしいとお願いしました。シムックスの社員に護身術を教える必要があると説明し、道場に通い始めました。

時間の制約もあったので、石崎さんのお師匠である田村先生からも教わりたいと考えました。そこで田村先生の道場近くにアパートを借り、泊まり込みでお二人から個人指導を受けることになりました。

とにかく時間がなかったので、すぐに黒帯を下さいとお願いしたところ、田村先生から「そんな簡単に黒帯は渡せない。柔道と同じように段階や級があり、一つ一つ試験を受けて進むものだ」という説明を受けました。

田村先生は私より少し背は低いものの、体格はがっしりしておられます。その後のやり取りで、柔道経験があるとお伝えすると、「私を押さえてみなさい」と言われ、そのまま道場に大の字で寝られました。

私は上から袈裟固めで押さえ込みましたが、何度やっても軽々と起き上がられてしまい、全く通用しません。その姿を見て、圧倒的な力の差を実感し、「これは本物だ」と感じました。やはり本当に力のある方を前にすると、素直に頭を下げて学ぶしかないと実感し、そこから本格的に教わるようになりました。

アパートは借りたものの、実際には一度も泊まることはありませんでした。稽古が夜遅くまで続いても、翌日の仕事が気になるので当時は新幹線ではなく普通列車で帰り、真夜中に熊谷へ着き、家内が車で迎えに来てくれる。そうした生活をおよそ一年続けておりました。

一年が経ったので、そろそろ黒帯を戴ける頃だと思い、黒帯を下さいとお願いしました。では試験をやりましょうということになり、お弟子さんが10人程集められ、10対1のかかり試験が始まりました。10人が次々に息もつかせず攻撃して来るのを捌く形で始まりました。

最初は教わった技で気持ち良く相手を投げていましたが、30分経つとすっかり疲れてしまい、ふらふらになり殆ど力が出なくなりました。ところが不思議なことに、その状態の方が合気道の技はよくかかり、立っているのもやっとな中で繰り出す技は驚くほど決まりました。最後は力尽きて倒れてし

まいりましたが、田村先生から「合格です」と言われて、正直ほっとしました。

この経験から、柔道との違いを強く感じました。柔道では力任せに投げることが多く、相手に怪我をさせてしまうこともありましたが、合気道では、むしろ力が抜けた状態の方が正しい技がかかり、相手を傷つけることはありません。

「女は画れりと」という言葉には、深い意味があると考えました。これは、力づくで物事を行っている時など、自分はここまでだと勝手に限界を決めてしまうことを指していると思います。

孔子が冉求に対してこのように諭した場面ですが、合気道を教わって気づいたのは、「余韻嫋嫋」という感覚の大切さです。たとえフラフラで力がほとんど出ない状態でも、動きに余韻が残るように体を使えば、その流れが途切れずに続き、自然と技がかかっていきます。もう駄目だと思える状況でも、やり方次第で稽古は続けられます。

このことから、孔子の「力足らざる者は中道にして廃す」は、力が尽きたからやめるのではなく、自分で限界を決めて途中でやめてしまう事を戒めていると解釈できます。ここでいう中道は一般的な意味ではなく、途中でやめてしまう事だと理解するのが適切でしょう。

② ^{し いわ}子曰く、^{ちゅうよう}中庸の^{とく た}徳為るや、^{そ いた}其れ至れるかな。^{たみ すくな}民 鮮^{ひさ}きこと久し。

(雍也第六・27)

「中庸」は後ろに「庸」がついていますが、ここではあまり気にせず「中」だけ見て下さい。「中」とは、多すぎず、少なすぎずという状態を指します。つまり、過不足のない程々の感覚だと思って下さい。

「中庸の徳為るや、其れ至れるかな」

ここでいう「庸」は、いつも変わらないと捉えて戴ければよいでしょう。例えば、先ほど挨拶をして戴いた吉川さんは、話をする時にいつもニコニコしています。内容によっては笑顔でいられないような場面でも、変わらずニコニコしている印象があります。しかし実際には、どんな時でも表情や態度を変えずにいることは難しく、普通は怒りや不満があれば顔や態度に出てしまうものです。

「庸」は、常に一定で変わらない状態を指します。また、「至る」は極限に達しているという意味です。

孔子は、中庸の徳を備えた人とは、いつも平常心で、感情に振り回されず、穏やかな状態を保てる人の事だと言っています。昔はそのような人が多くいましたが、長い年月の中で次第に少なくなっていました。今では、感情をそのまま表に出してしまう人が増え、常に穏やかでいようとする人は殆どいなくなってしまった、という嘆きです。

言い換えれば、昔は中庸の徳を身につけた穏やかな人が多かったのに、今は何故こんなにも少なくなってしまったのか、世の中はなぜここまで乱れてしまったのか、と孔子が弟子たちに語りかけている場面です。

現代の社会や日本の状況と照らし合わせて読むと、この言葉の意味がより実感できると思います。

③子曰く、中行^{し いわ ちゆうこう え これ とも}を得て之と与にせずんば、必ずや^{かなら}狂狷^{きやうけん}か。狂者^{きやうしゃ}は進みて取り、^{けんしゃ な}狷者は為さざる^{ところ あ}所有り。(子路第十三・21)

「子曰く、中行を得て之と与にせずんば」

孔子がもし中行の人を得ることができれば、その人と共に道を歩みたいという意味で述べた言葉です。中行の人とは、過不足のない生き方、前出の「中庸の道」を実践する人のことです。

孔子は、そのような中庸の徳を備えた人は、次に出てくる「狂」や「狷」といった人々の中に見いだせるだろう、と続けていきます。

「必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は為さざる所有り。」

ここでいう「狂」は、志が非常に高い人です。理想としては立派なことを考え、良いことを口にしますが、実際の行いがそれに伴わない場合もあります。志が高いという点は評価されます。

「狂者は進みて取る」とあるように、狂者は、良い事だと判断すれば自ら進んで行おうとします。行いが完全ではなくても、善を実行しようとする積極性や実行力がある為、孔子はこのような人に自分の道を伝えたいと考えたのです。

「狷者は為さざる所有り」

狷者は悪い事を決してしない人です。狷者は知恵がやや足りない面はありますが、節義を守る誠実さがあります。そのため孔子は、不足している知恵は教えて補えばよいと考え、このような人にも道を伝えたいとしています。

孔子は、志が高く行動力のある「狂者」と、悪を行わない誠実な「狷者」、二つのタイプを弟子として選び、自分の道を伝えたいと考えていました。

④ 堯 曰く、咨、爾 舜。天の暦数、爾 が躬に在り。允 に其の中を執れ。四海困窮せば、天禄 永く終らんと。舜 も亦 以て禹に命ぜり。（堯曰第二十・1）

堯は舜に対して、「天の暦数、爾が躬に在り。允に其の中を執れ。四海困窮せば、天禄 永く終らん」と命じ、舜もまた禹に同じように命じたとされています。

これは中国において、堯・舜・禹という非常に優れた聖人が政治を行っていた歴史があるので、中国人の中に、自国には理想的な統治者がいたという誇りがあると考えられます。

そして堯は高齢となり、体力や判断力も次第に衰えてきたので、そろそろ次の世代に政治を引き継ぐ時期だと考えました。その際に、天が定めた運行や自然の秩序、時の流れを意味する「天の暦数」の定めによれば、次にその役割を担うべき人物は舜であるとされ、その役目はお前だと伝えています。

「允に其の中を執れ」

誠実に中庸の道を守り、偏りのない政治を行いなさいという意味です。

「旗竿を執れ」という言葉は、日本で戦国時代の旗指物をイメージすると分かりやすいでしょう。戦の際、大將がいる場所には、ここに大將がいると示す為の旗をしっかりと立てておきます。旗が堂々と立っている限り、我が軍は大丈夫だと、兵士たちに安心感と目指すべき方向性を与えることができます。

つまり堯は舜に対して、天の意志に従いながら中庸を守り、誠実に政治を行うよう託した、ということになります。

「四海困窮せば、天禄 永く終らんと。舜も亦 以て禹に命ぜり」

もし世界中の民が困窮するようなことになれば、天から与えられた禄や統治の資格は長く続かない、という意味です。

中国には古くから、自国を世界の中心であり最も優れた国であるとする思想がありました。どれほど立派な国であっても、世界中の人々が苦しみ困窮するような状況になれば、天から与えられた恩恵や統治の正当性は長く保つことが出来ません。

その為、堯は舜に対して「お前が次の統治者である。誠実に中道の道を歩みなさい」と教えました。その責任と権威の象徴として旗指物をしっかり握るように命じたのです。その旗を握り続けられなくなるような事態、天下の人々が苦しみ、生活が立ち行かなくなるような状況が起これば、それは天から与えられた禄が長く続かないことを意味します。そのような時には、自らの地位に執着せず、次に相応しい人物へその役目を譲らなければならない、という教えです。

「舜も亦 以て禹に命ぜり」

堯から舜へ、舜から禹へと受け継がれた政治の基本は全て同じであるということです。その根本にあるのは「中道」の考え方です。何事も極端に走らず、程々のところを保ちながら進むことを大切にしていたのです。

物の見方や行動についても、積極的すぎてはいけませんし、消極的すぎてもいけません。どちらか一方に偏りすぎることもよくありません。大切なのは、程良いバランスを保つことです。そのような生き方や政治のあり方こそが、天の定めた道であると考えられていました。

天道という言葉を使うと大げさに感じるかもしれませんが、中道という言葉で覚えておけばよいでしょう。

冉求のところで出てきた中道は、途中という意味でした。しかし、論語で使われる「中」という字の多くは、その意味ではありません。ここでいう「中」とは、真ん中を保つこと、偏らないことを指します。

例えば、棒のちょうど中央に物を置けば安定しますが、少し右へ寄せれば落ちてしまいます。右に寄りすぎたからといって今度は左へ寄せると、やはり落ちてしまいます。大切なのは、どちらにも偏らず、ちょうどよい位置を保つことです。

このように、中道の「中」とは、極端に走らず、適切な均衡を保つことを意味しています。

今回の素読では、中道の中でも、特に「中」という文字が最も重要なポイントです。その意味をしっかりと受け止めていただければよいでしょう。

世界情勢を語る上で、どうしてもトランプ大統領の話は避けて通れません。世界がおかしくなる時には、それをさらに進める人物が至る所に現れるものです。以前、グローバリズムにとどめを刺す役割としてトランプ大統領が登場した話をしました。

今、その流れに沿って、トランプ大統領は世界を壊す方向へ動いています。アメリカ国内では、トランプ大統領が実施した関税政策の一部について、最高裁が法的根拠を認めず、違法と判断した事例がありました。

それに関連して、昨日2月20日付けで、世界各国を対象とした10%の関税措置を新たに発表する等、次々と政策を打ち出しています。ただし、これらの措置については実際の運用や適用範囲が変更されることも多く、恫喝・交渉材料として使われていると感じます。

大統領令とは議会の承認を必要としません。大統領が判断し、署名をすれば、行政府は即座に実行する仕組みになっています。アメリカの制度を使って世界を動かそうとしている訳です。

それは自国だけが良ければ良いという発想で行われているものであり、他国がどうなろうと構わないという姿勢に見えます。その為、資本主義国家、民主主義国家として問題ではないかという批判も多く出ています。

その指摘はもっともで、実際その通りだと思います。世界各国にかかっている迷惑は、かなり大きなものになってきました。しかし、トランプ大統領の立場から見れば、まだ足りない、自分たちの国だけが損をしている、という一種の被害意識のもとで行動しているのだと思います。したがって、今後もさらに厳しい状況が続いていくのではないかと感じています。

結果として、グローバリズムが終わった後は、各国が自国ファーストへ向かっていくでしょう。そして、政治的・歴史的・人種的に近い国々が集まり、一つのまとまりを形成していくようになると思います。

結果、世界は5つか6つほどの共同圏に分かれていくでしょう。ただ日本だけは独立した形で進んでいくと思います。

では、日本は今後どうなるのかです。世界の中で見れば、円安はさらに加速するでしょう。日本の国力は弱まっていますし、その傾向が今後さらに強まると感じています。

高市早苗さんに関連して、一つ気になっていることがあります。毎年2月7日に、東京で北方領土返還要求全国大会が開催されます。これは、総理大臣が必ず出席することになっています。

私は、中曽根康弘首相が総理大臣だった頃から、この北方領土返還要求全国大会に出席し続け、総理大臣の警護体制を毎年視察しています。

昔、JC（青年会議所）で北方領土委員会に所属していたことがあります。中曽根康弘さんが総理大臣だった頃、北方領土返還要求全国大会の警備については、民間側をJCが担当していました。私はJC側の警備責任者として参加しており、警察側からは公安関係者が出席していました。

そこで、総理大臣の警護をどのように行うかについて、警察側と民間側で細かな打ち合わせを重ね、実際の警備体制を構築・運用していました。

JCを卒業した後も毎年招待状を戴くので会場に足を運び、40年程にわたって総理大臣の警護体制を見続けてきました。振り返ってみると、当初は現在のような警備・警護体制ではありません。

中曽根康弘さんについては、地元事務所の警備はシムックスが担当していました。総理大臣就任後には、県警と警備体制について協議を行い、万が一事務所への襲撃があった場合、どう対応するかについても検討していました。

大型ダンプカーによる突入事態を想定し、それを物理的に阻止する方法や、万一突入が発生した場合の対応手順、その後の警護体制について、県警と詳細な打ち合わせを行い、実際に対策を講じていました。高崎市にある青雲塾会館でのことです。そうした経験も踏まえながら、北方領土返還要求全国大会の警備責任者として警護対応に携わっていました。

当時の総理大臣警護は、ごく一般的な体制で行われていたように思います。警護の考え方としては、総理大臣が公務に出席し活動することを前提に、その職務を安全に遂行できるよう守るというものでした。

一方で、皇室の方々に対する警護は、その考え方や体制に大きな違いがあることも感じていました。天皇陛下や皇后陛下がご出席される場合には、極めて厳重な警護体制が敷かれます。その為、天皇皇后両陛下がご出席される行事と、総理大臣が出席する行事とでは、警察の警護に対する考え方や運用

方法が大きく異なっているように見えました。

事情を知らない方から見れば、どちらの場合も非常に厳重な警備が行われているように見えると思います。

ところが、途中から変化がありました。細川護熙さんが総理大臣に就任された時、警護体制が厳格になりました。

振り返ると、基本的な警護体制の考え方は引き継がれてきたように思いますが、総理によって内容は大きな差があります。警備体制が手抜き状態になったと感じた時は、安倍晋三首相の時代でした。今回、高市早苗総理に関する警備は安倍首相時代を思い起こさせます。

一方で、茂木外務大臣が登壇する際には、観客から見えない位置に待機していた SP が大臣のすぐ後に付き、安全確保に当たっていました。外務大臣側は狙われる可能性があると感じていたと見えます。同じ会場内でも警護の対応に違いが見られました。

長年こうした会場の警護体制を見てきた立場からすると、今回の高市総理の警備については、根本から改善しなければならないと思います。

高市首相は警備が手薄な印象の一方で、茂木外務大臣については厳重警備の体制を敷いていました。これは命令の出し方が異なっているということです。

最近の SP は以前とは異なり、昔は一般の人から見えないように警護するのが普通でしたが、途中から「私は SP です」と分かるように、あえて目立つ形で警護するようになってきています。

イギリスのトラス首相のケースでは、彼女は大減税を掲げ、首相になった直後に大減税を実施すると発表しました。その財源については、すべて国債、つまり借金で賄うとしました。結果、44 日間しか政権が持ちませんでした。

高市さんが総理大臣になった時は少数与党であったため、トラス首相の二の舞になるのではないかと当時のメディアは盛んに報じました。しかし現在状況は全く変わっています。

そうするとメディアとしては、自分たちが出した予測が次々と覆されている為、強い不満を抱いているように見えます。その結果、先程の時事通信のような報道が出てきたと考えられます。朝日新聞も、全体としてネガティブな報道が多い傾向にあります。

ということで、高市総理が力を持ち始めると、さらに批判や攻撃の対象になるでしょう。現在は勢いに乗っている状態ですが、それだけ存在感やオーラを発していると、簡単にはバッシングの効果が表れません。

ただ、何か失敗した時には、多くの人から一斉に批判を受けることになるでしょう。その際、それを跳ね返すことができれば、本物の政治家になれるのだと思います。ですから今は、まさに本物になれるかどうかの境目で、その間を行き来している最中なのではないかと私は思います。

日本はその流れに合わせる形で、円安とインフレが進んでいくことになります。昭和21年2月17日については、これを調べる人が増えてきました。

東京フォーラム終了後には、SNS上でどれだけ調べたか情報交換をする人たちも見られるようになりました。ようやく2月17日について調べようという気持ちになった方がいることを嬉しく思います。

日本が衰退へ向かう引き金を引いたのは、高市総理だと私は捉えています。もちろん、そのような状況がすぐに訪れる訳ではありません。しかし、時間が経てば経つほど、そうした方向へ進む可能性は高まっていくと思います。

一方で、世界は先程申し上げた通り、グローバリズムの時代が終わっていくと考えています。そして、各国が新たな枠組みを形成し、世界規模の仲間同士が4~5程度の圏域に分かれて現れてくるのではないかと考えています。

〈恒例の質問〉

今年に入って1カ月と少し経ちましたが如何でしょうか。

- 今年良い日が続いておられる方
- 嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方
- 有難うと言い続けているし、有難うと言われ続けている方
- 身体の手入れをよくやっていると思う方
- 自分磨きをよくやっていると思う方
- 昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

皆さんのお話がだいたい同じような内容になってきていることもあり、この質問スタイルについても、そろそろ少し考えてみようかと思っています。

この質問を通して考え方に変化が生まれ、知らず知らずのうちに嘘をつかないようになった、有難うと言う機会が増えた、笑顔が以前より増えた、というお話を伺うこともあります。

そうしたことも含め、20 周年以降は少し考えてみようかなと思っています。本日は終了と致します。有難う御座居ました。